

# 『父の中国と私の中国』

小川 平四郎著

・評・ 中嶋 嶺雄

書を通してユニークに

本書は、その副題「書が語る日中の百年」が示すように、中国の革命家や政治指導者たちが、著者およびその実父であられた小川平吉（射山）に寄せた書を中心に綴ったメモワールである。言ってみれば、小川家二代にわたる日中交流の歴史を備忘録風にまとめたものであるが、そうした著作にありがちな私家庭的な狭い座標のうえに綴られたものではない。日中両国の近現代史の現場をおのずと垣間見せてくれる、きわめてユニークな著書だと言えよう。

著者は、よく知られているように、一九七二年の日中国交樹立によって翌年二月、初代の駐中華人民共和国大使に任命されたベテラ

サイマル出版会 1,600円



ンの中国サービス外交官である。そして著者の父・小川平吉は、清朝末期から辛亥革命を経て中華民国が誕生し、やがて北伐、国民革命、次いで張作霖爆死事件から満州事変、日華事変へと続く激動の日中近現代史に活躍した政客であった。

政治家としては、故郷の長野県諏訪郡の富士見を地盤に明治から昭和まで活躍したが、近衛篤磨公（霞山）を中心とする東亜同文会に中心人物として参画していることに示されるように、生涯にわたり中国問題に深くかかわってきた。その四男の著者は、現在、中国問題専門の月刊誌として定評ある『東亜』や『中国総覧』『現代中国人名辞典』などの発行母体であるとともに近衛公ゆかりの財団法人・霞山会の常務理事であるなど、小川家は

こうして中国とは切っても切れない関係にある。その親子二代にわたる中国とのかわわりを、本書では康有為、孫文、黄興、宋教仁、鄧小平、郭沫若、廖承志、薄傑の八人の書によって綴っている。前の四人が父・平吉氏宛ての書、後の四人が著者に贈られた書である。

まず、清末の改革派で戊戌変法の立役者・康有為の書は、彼が滞日して原敬らに会った明治三十一年頃のものであり、「不画有為、不現無為」とみずからの名を読みこんだ額入りの書である。

しかし、孫文と並ぶ辛亥革命の雄で袁世凱糾弾の急先鋒だった黄興が陶淵明の有名な詩をもじって「平吉の別荘・帰去来荘のために認めた最晩年（一九一六年）の巧みな筆致に比べると、かなり見劣りするの否めな

い。

いつも「博愛」書いた孫文  
孫文の「博愛」の二文字の書は、各地の孫文記念館でよく見かけるものと同じである。孫文は書が不得手で、揮毫を求められると、いつもこの二文字を書いたようだが、小川家

の「博愛」(著者の兄で永く代議士をつとめた小川平二氏蔵)は、なかなかよい字である。

孫文、黄興とともに忘れられない人物で、袁世凱の刺客に暗殺された宋教仁の書は、文天祥の正氣の歌の冒頭を篆書で記した優美な一幅である。

これにたいして、現代の中国の指導者の書はどうであろうか。周恩来総理の書もかなり残っており、なによりも天安門広場の人民英雄記念碑の碑文がよく知られているが、必ずしも達筆とは言えないように思う。これにたいして、毛沢東は、やや右肩あがりの草書が得意で、漢詩も能くしただけに、書もなかなかのものだと思いが、好き嫌いが分かれそうな筆跡である。

一時は毛沢東後継者とも称えられた華国鋒の色紙も本書に出ているけれど、安っぽい字でいただけでない。昭和十三年頃に蔣介石(中正)が射山に贈った写真に記した能筆とは比べべくもない。

### 「松柏長青」第一級の郭沫若

さて、著者が本書でとりあげているのは、鄧小平、郭沫若、廖承志、溥儀の四名の書である。

まず鄧小平の書は日中国交樹立二周年の時期に初代中国大使に贈られたものであり、「一衣帶水 睦鄰友好」とあるが、私は決して達筆とは思わない。日中友好に尽力された廖承志の書「中日両国人民世代友好下去」も、スローガンを書いただけのようであり感心しない。

これにひきかえ、いわゆるラストエンペラー溥儀の弟の溥儀の書は、自作の長詩を綴っていて学殖の片鱗も見せているが、かなり癖のある字である。四人の中では「松柏長青」と記した郭沫若の書が第一級だろうか。文革初期に「毛沢東思想」を礼讃してみずから旧著を焼き捨てる断言した郭沫若も、晩年には「松柏長青」の心境に到ったようである。

本書には、以上のように書にまつわる記述のほか、最近の中国についての著者の文章も後半に収められている。それらの文章について著者は謙遜されているが、著者らしいパランスのとれた文章がなかなかの説得力をもっている。それだけに、本書の一部に記憶違いと思われる箇所があったり、すぐに入手可能な『王明回想録』などに記憶だけで言及されている点など、もっと正確を期されたいと思ふけれど、それは望蜀の言というべきであらう。

(ながじま・みねお 東京外大教授)

